

2025年度（2026年3月31日現在）貸借対照表

（単位：百万円）

科 目	金額	科 目	金額
（資産の部）		（負債の部）	
現金及び預貯金	72,877	保険契約準備金	3,815,549
預貯金	72,877	支払備金	37,041
債券貸借取引支払保証金	36,065	責任準備金	3,774,199
有価証券	3,769,709	契約者配当準備金	4,308
国債	2,836,724	代理店借	4,360
地方債	49,094	再保険借	1,080
社債	283,546	その他の負債	27,185
株式	14,153	債券貸借取引受入担保金	3,078
外国証券	502,285	未払法人税等	2,721
その他の証券	83,904	未払金	12,614
貸付金	44,227	未払費用	7,501
保険約款貸付	44,227	前受収益	1
有形固定資産	2,910	預り金	147
建物	1,571	金融派生商品	295
リース資産	443	リース債	511
その他の有形固定資産	895	仮受金	304
無形固定資産	4,412	その他の負債	8
ソフトウェア	3,741	役員賞与引当金	104
その他の無形固定資産	671	退職給付引当金	6,140
代理店貸	261	時効保険金等払戻引当金	618
再保険貸	11,344	特別法上の準備金	14,078
その他の資産	53,564	価格変動準備金	14,078
未収金	36,585	負債の部合計	3,869,116
前払費用	5,162	（純資産の部）	
未収収益	9,139	資本	17,250
預託金	1,891	資本剰余金	13,333
金融派生商品	99	資本準備金	13,333
金融商品等差入担保金	380	利益剰余金	106,572
仮払金	233	利益準備金	3,916
その他の資産	72	その他利益剰余金	102,655
繰延税金資産	25,371	保険業法施行規則	
貸倒引当金	△197	附則第10条積立金	325
		繰越利益剰余金	102,330
		株主資本合計	137,155
		その他有価証券評価差額金	14,426
		繰延ヘッジ損益	△150
		評価・換算差額等合計	14,276
		純資産の部合計	151,431
資産の部合計	4,020,548	負債及び純資産の部合計	4,020,548

注記事項

(貸借対照表関係)

1. 会計方針に関する事項

(1) 有価証券の評価基準および評価方法

有価証券の評価は、売買目的有価証券については時価法(売却原価の算定は移動平均法)、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、「保険業における「責任準備金対応債券」に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第21号)に基づく責任準備金対応債券については、移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については、時価法(売却原価の算定は移動平均法)、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法によっています。その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しています。

(2) 責任準備金対応債券

個人保険に設定した小区分(保険種類・資産運用方針等により設定)に対応した債券のうち、負債に応じたデュレーションのコントロールを図る目的で保有するものについて、「保険業における「責任準備金対応債券」に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」に基づき、責任準備金対応債券に区分しています。小区分に係る責任準備金のデュレーションと責任準備金対応債券のデュレーションを一定幅の中でマッチングさせる運用方針をとっています。なお、責任準備金対応債券に係る貸借対照表計上額は 2,225,837 百万円、時価は 1,380,228 百万円です。

(3) デリバティブ取引の評価基準および評価方法

デリバティブ取引の評価は時価法によっています。

(4) 有形固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は、それぞれ次の方法によっています。

- ・有形固定資産(リース資産以外)

定額法を採用しています。

- ・リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しています。

(5) 無形固定資産の減価償却の方法

- ・ソフトウェア

利用可能期間に基づく定額法によっています。

(6) 外貨建資産等の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は3月末日の為替相場により円換算しています。

(7) 引当金の計上方法

① 貸倒引当金

貸倒引当金は、債権の貸倒れによる損失に備えるため、当社の定める「資産査定規程」および「同細則」に基づき、次のとおり計上しています。

個別債権毎に回収可能性または価値の毀損状態を査定し、回収可能性に重大な懸念があると判断した債権または重大な価値の毀損が生じていると判断した債権については必要と認められる額を引当てています。

また、上記以外の債権については過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率を債権額に乗じた額を引当てています。

なお、全ての債権は、「資産査定規程」および「同細則」に基づき、管轄部署が1次資産査定を実施し、当該部署から独立した部署が2次資産査定を実施し、内部監査部が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っています。

② 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号)に従い、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、計上しています。

退職給付債務見込額ならびに退職給付費用の処理方法は以下のとおりです。

退職給付見込額の期間帰属方法	給付算定式基準
数理計算上の差異の処理年数	10 年
過去勤務費用の処理年数	5 年

③ 役員賞与引当金

役員賞与引当金は、役員に支給する業績連動報酬の支払いに備えて、「役員賞与に関する会計基準」（企業会計基準第 4 号）に基づき、内規に基づく支給見積額を計上しています。また、株価連動型報酬制度に基づく支給見込額のうち、当年度末において発生していると認められる額を計上しています。

④ 時効保険金等払戻引当金

時効保険金等払戻引当金は、時効処理を行った保険金等について契約者からの払戻請求に基づく払戻損失に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り、必要と認められる額を計上しています。

（8）価格変動準備金の計上方法

価格変動準備金は、保険業法第 115 条の規定に基づき算出した額を計上しています。

（9）ヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法は、「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第 10 号）に従い、外貨建債券の一部に対する為替変動リスクのヘッジとして為替予約および通貨オプション取引による時価ヘッジ、ならびに外貨建債券の一部に対する為替変動に係るキャッシュ・フローのヘッジとして通貨スワップによる繰延ヘッジを行っています。なお、ヘッジの有効性の判定には、主に、ヘッジ対象とヘッジ手段の時価変動やキャッシュ・フロー変動を比較する比率分析によっています。

（10）消費税等の会計処理

消費税および地方消費税の会計処理は、税抜方式によっています。ただし、事業費等の費用は税込方式によっています。なお、資産に係る控除対象外消費税等のうち、税法に定める繰延消費税等については、前払費用に計上のうえ 5 年間で均等償却し、繰延消費税等以外のものについては発生年度に費用処理しています。

（11）保険料の計上方法

初回保険料は、原則として、収納があり、保険契約上の責任が開始しているものについて、当該収納した金額により計上しています。

また、2 回目以降保険料は、収納があったものについて、当該金額により計上しています。

なお、収納した保険料のうち、期末時点において未経過となっている期間に対応する部分については、保険業法第 116 条および保険業法施行規則第 69 条第 1 項第 2 号に基づき、責任準備金に積み立てています。

（12）保険金の計上方法および支払備金の積立方法

保険金等支払金（再保険料を除く）は、保険約款に基づく支払事由が発生し、当該約款に基づいて算定された金額を支払った契約について、当該金額により計上しています。

なお、保険業法第 117 条および保険業法施行規則第 72 条に基づき、期末時点において支払義務が発生したもの、または、まだ支払事由の報告を受けていないものの支払事由が既に発生したと認められるもののうち、それぞれ保険金等の支出として計上していないものについて、支払備金を積み立てています。

既発生未報告支払備金（まだ支払事由の発生の報告を受けていないが保険契約に規定する支払事由が既に発生したと認める保険金等をいう。以下同じ。）については、新型コロナウイルス感染症と診断され、宿泊施設または自宅にて医師等の管理下で療養をされた場合（以下「みなし入院」という。）等に入院給付金等を支払う特別取扱を 2023 年 5 月 8 日以降終了したことにより、平成 10 年大蔵省告示第 234 号（以下「IBNR 告示」という。）第 1 条第 1 項本則に基づく計算では適切な水準の額を算出することができないことから、IBNR 告示第 1 条第 1 項ただし書の規定に基づき、以下の方法により算出した額を計上しています。

（計算方法の概要）

IBNR 告示第 1 条第 1 項本則に掲げる全ての事業年度の既発生未報告支払備金積立所要額及び保険金等の支払額から、みなし入院に係る額を除外した上で、IBNR 告示第 1 条第 1 項本則と同様の方法により算出しています。

（13）責任準備金の積立方法

期末時点において、保険契約上の責任が開始している契約について、保険契約に基づく将来における債務の履行に備えるため、保険業法第 116 条第 1 項に基づき、保険料及び責任準備金の算出方法書（保険業法第 4 条第 2 項第 4 号）に記載された方法に従って計算し、責任準備金を積み立てています。

責任準備金のうち保険料積立金については、次の方式により計算しています。

- ・標準責任準備金の対象契約については、金融庁長官が定める方式（平成8年大蔵省告示第48号）
- ・標準責任準備金の対象とならない契約については、平準純保険料式

責任準備金のうち危険準備金については、保険業法第116条および保険業法施行規則第69条第1項第3号に基づき、保険契約に基づく将来の債務を確実に履行するため、将来発生が見込まれる危険に備えて積み立てています。

なお、保険業法第121条第1項および保険業法施行規則第80条に基づき、毎決算期において責任準備金が適正に積み立てられているかどうかを、保険計理人が確認しています。

2. 未適用の会計基準等に関する事項

当期末までに公表されているものの、適用されていない会計基準等は以下のとおりです。

- ・「リースに関する会計基準」（企業会計基準第34号）
- ・「リースに関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第33号）等

（1）概要

企業会計基準委員会において、日本基準を国際的に整合性のあるものとする取組みの一環として、借手の全てのリースについて資産および負債を認識するリースに関する会計基準の開発に向けて、国際的な会計基準を踏まえた検討が行われ、基本的な方針として、IFRS第16号の単一の会計処理モデルを基礎とするものの、IFRS第16号の全ての定めを採り入れるのではなく、主要な定めのみを採り入れることにより、簡素で利便性が高く、かつ、IFRS第16号の定めを個別計算書類に用いても、基本的に修正が不要となることを目指したリース会計基準等が公表されました。

借手の会計処理として、借手のリースの費用配分の方法については、IFRS第16号と同様に、リースがファイナンス・リースであるかオペレーティング・リースであるかにかかわらず、全てのリースについて使用権資産に係る減価償却費およびリース負債に係る利息相当額を計上する単一の会計処理モデルが適用されます。

（2）適用予定日

2027年4月1日に開始する事業年度から適用予定です。

（3）当該会計基準の適用による影響

「リースに関する会計基準」等の適用による計算書類に与える影響額については、現時点で評価中です。

3. 金融商品の状況に関する事項および金融商品の時価等に関する事項

（1）金融商品に対する取組方針

当社は生命保険事業を営んでいるため、保険業法第118条第1項に規定する特別勘定以外の勘定である一般勘定の資産運用については、ALM（資産・負債の総合管理）の観点から、負債である保険契約の特性を踏まえ、長期的に安定した収益を確保することを基本方針としています。

上記の方針に基づき、当社では長期の円建債券を中心とした運用を行っています。また、分散投資の効果を享受するため、外貨建債券などを組み入れているほか、保険約款に基づく契約者貸付を行っています。デリバティブについては、後述するリスクを低減するため活用しており、運用収益の獲得を目的とする取引は行わない方針としています。

また、特別勘定資産の運用については、長期的に財産の価値を高めることを基本方針としています。

（2）金融商品の内容およびそのリスク

当社が保有する金融資産は主に債券、株式等の有価証券であり、金利・為替・株価など市場の変動により価格が下落する市場リスク、市場の混乱等により市場において取引ができなかったり、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされたりする流動性リスクを有しています。

また、債券・貸付金等については、発行体・貸付先の信用力の低下や破綻等により価値が減少する信用リスクを有しています。

デリバティブ取引については、主として保有資産のリスクをヘッジする目的で利用しており、これらの取引に対してはヘッジ会計を適用しています。このため、ヘッジ手段であるデリバティブ取引で発生する損益は、ヘッジ対象である保有資産で発生する損益と相殺されます。デリバティブ取引は、市場リスクおよび取引金融機関の信用リスクを有しています。

（3）金融商品に係るリスク管理体制

当社は、「SOMPOグループERM基本方針」に則り、不測の損失を極小化するとともに、資本を有効活用し、適切なリスクコントロールのもと収益を向上させ、当社の企業価値の最大化を図ることを目的とした「戦略的リスク経営」を実践しています。また、戦略的リスク経営を運営するため、戦略的リスク経営に係る態勢

を整備する部署を設置しています。

当社は、資産運用利回りが保有契約の予定利率を下回るリスクを含め、市場リスク、信用リスクを一元的に管理し、資産運用リスクモデルにより計測した資産運用リスク量を経営体力に見合った適正な水準にコントロールしています。また、過去に発生した最大規模の市況下落などを想定し、その影響度を測定するストレステストを行い、リスク管理に活用しています。信用供与先の管理としては、特定与信先へのリスク集積回避のため、与信先ごとのリミット管理を行っています。

流動性リスクについては、日々の資金繰り管理のほかに、大量解約の発生など、流動性リスク・シナリオ発現に伴う解約返戻金などの資金流出額を予想し、それに対応できる流動性資産が十分に確保されるように管理しています。

(4) 金融商品の時価等に関する事項

2026年3月31日における貸借対照表計上額および時価、ならびにこれらの差額については、次のとおりです。

なお、市場価格のない株式等は、次表には含めていません（(注2) 参照のこと。）。

また、現金及び預貯金、債券貸借取引支払保証金、未収金、債券貸借取引受入担保金は、短期間（1年以内）のものが大半を占めており、時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しています。

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 有価証券			
売買目的有価証券	63,181	63,181	-
満期保有目的の債券	325,012	245,564	△ 79,447
責任準備金対応債券	2,225,837	1,380,228	△ 845,608
その他有価証券	1,155,576	1,155,576	-
	3,769,607	2,844,551	△ 925,056
(2) 貸付金			
保険約款貸付	44,227	44,227	-
資産計	3,813,835	2,888,778	△ 925,056
デリバティブ取引(*)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	-	-	-
ヘッジ会計が適用されているもの	(196)	(196)	-
デリバティブ取引計	(196)	(196)	-

(*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、() で示しています。

(注1) 有価証券およびデリバティブ取引に関する事項

(1) 有価証券

有価証券については3月末日の市場価格等によっています。

なお、保有目的区分ごとの有価証券に関する注記事項は以下のとおりです。

① 売買目的有価証券

特別勘定運用資産として保有しています。なお、売買目的有価証券において、当年度の特別勘定資産運用損益に含まれた評価益は 7,307 百万円です。

② 満期保有目的の債券

満期保有目的の債券において、種類ごとの貸借対照表計上額および時価、ならびにこれらの差額については、次のとおりです。なお、当年度中に売却した満期保有目的の債券はありません。

(単位：百万円)

	種類	貸借対照表計上額	時価	差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	(1) 国債・地方債等	32,453	32,883	429
	(2) 社債	299	302	2
	(3) その他	-	-	-
	小計	32,753	33,185	432
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	(1) 国債・地方債等	224,941	168,081	△ 56,860
	(2) 社債	67,317	44,297	△ 23,019
	(3) その他	-	-	-
	小計	292,258	212,378	△ 79,880
合計		325,012	245,564	△ 79,447

③ 責任準備金対応債券

責任準備金対応債券の当年度中の売却額は 110,323 百万円であり、売却損の合計額は 20,377 百万円です。また、責任準備金対応債券において、種類ごとの貸借対照表計上額および時価、ならびにこれらの差額については、次のとおりです。

(単位：百万円)

	種類	貸借対照表計上額	時価	差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	(1) 国債・地方債等	-	-	-
	(2) 社債	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	-	-	-
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	(1) 国債・地方債等	2,213,182	1,373,080	△ 840,102
	(2) 社債	12,654	7,148	△ 5,505
	(3) その他	-	-	-
	小計	2,225,837	1,380,228	△ 845,608
合計		2,225,837	1,380,228	△ 845,608

④ その他有価証券

その他有価証券の当年度中の売却額は 331,618 百万円であり、売却益の合計額は 9,472 百万円、売却損の合計額は 14,115 百万円です。また、その他有価証券において、種類ごとの取得原価または償却原価および貸借対照表計上額、ならびにこれらの差額については次のとおりです。

(単位：百万円)

	種類	取得原価または 償却原価	貸借対照表計上額	差額
貸借対照表計上額が取得原価または償却原価を超えるもの	(1) 株式	-	-	-
	(2) 債券	608,100	658,332	50,232
	① 国債・地方債等	327,335	331,662	4,327
	② 社債	2,734	2,799	64
	③ その他	278,030	323,871	45,840
	(3) その他	121,332	132,361	11,028
	小計	729,432	790,694	61,261
貸借対照表計上額が取得原価または償却原価を超えないもの	(1) 株式	-	-	-
	(2) 債券	389,912	351,073	△ 38,839
	① 国債・地方債等	86,740	78,750	△ 7,990
	② 社債	226,189	199,415	△ 26,774
	③ その他	76,981	72,907	△ 4,074
	(3) その他	15,941	13,809	△ 2,132
	小計	405,853	364,882	△ 40,971
合計		1,135,286	1,155,576	20,290

⑤ 上記の表中にある「取得原価」は減損処理後の帳簿価額です。

(2) デリバティブ取引

① ヘッジ会計が適用されていないもの

該当する事項はありません。

② ヘッジ会計が適用されているもの

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、ヘッジ会計の方法ごとの3月末日における契約額または契約において定められた元本相当額等は、次のとおりです。

(単位：百万円)

ヘッジ会計 の方法	デリバティブ 取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等		時価
				うち1年超	
繰延ヘッジ	通貨スワップ取引 米ドル払/円受	その他 有価証券	5,395	5,395	△ 211
時価ヘッジ	為替予約取引 売建	その他 有価証券			
	ユーロ (対円)		4,339	-	9
	加ドル (対円)		2,405	-	34
	通貨オプション取引 買建プット	その他 有価証券			
	米ドル		79,209	-	43
	ユーロ		5,408	-	0
	豪ドル		19,509	-	11
	売建コール				
	米ドル		90,541	-	△ 77
	ユーロ		6,120	-	△ 0
	豪ドル		24,735	-	△ 6
合計			237,667	5,395	△ 196

(注2) 市場価格のない株式等の当年度末における貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の計表中の「有価証券」には含めていません。

(単位：百万円)

区分	貸借対照表計上額
非上場株式(*)	101

(*) 非上場株式については、市場価格がないことから時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権および満期のある有価証券の決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
有価証券	86,790	235,290	80,814	73,892	73,951	3,197,882
満期保有目的の債券	4,630	6,325	1,574	1,686	700	311,279
責任準備金対応債券	-	-	-	-	-	2,365,700
その他有価証券のうち満期があるもの	82,160	228,965	79,240	72,206	73,251	520,903
合計	86,790	235,290	80,814	73,892	73,951	3,197,882

(※1) 保険約款貸付については、貸付金額を解約返戻金相当額の一定の範囲内に限るなどの特性により返済期限を設けていないため、上記の表には含めていません。

(※2) 外貨建債券については、期末日為替レートで換算した金額を償還額として記載しています。

4. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性および重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しています。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しています。

(1) 時価をもって貸借対照表計上額とする金融資産および金融負債

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル 1	レベル 2	レベル 3	合計
有価証券				
売買目的有価証券				
国債・地方債等	4,644	182	-	4,827
社債	-	1,059	-	1,059
株式	14,052	-	-	14,052
その他	12,123	1,031	30,086	43,241
その他の有価証券				
国債・地方債等	367,102	43,310	-	410,413
社債	-	202,214	-	202,214
株式	-	-	-	-
その他	123,944	337,518	81,486	542,948
資産計	521,866	585,318	111,572	1,218,757
デリバティブ取引(*)				
通貨関連	-	(196)	-	(196)
デリバティブ取引計	-	(196)	-	(196)

(*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、() で示しています。

(2) 時価をもって貸借対照表計上額としない金融資産および金融負債

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル 1	レベル 2	レベル 3	合計
有価証券				
満期保有目的の債券				
国債・地方債等	195,543	5,420	-	200,964
社債	-	44,600	-	44,600
その他	-	-	-	-
責任準備金対応債券				
国債・地方債等	1,373,080	-	-	1,373,080
社債	-	7,148	-	7,148
その他	-	-	-	-
貸付金				
約款貸付	-	-	44,227	44,227
資産計	1,568,624	57,169	44,227	1,670,021

(3) 時価の算定に用いた評価技法およびインプットの説明

① 有価証券

活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しています。主に株式、国債、上場投資信託がこれに含まれます。公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しています。主に地方債、社債がこれに含まれます。非上場投資信託については、委託会社から提示された基準価額によっており、主に信託財産の構成物のレベルに基づきレベル2またはレベル3の時価に分類しています。私募債は、第三者から入手した価格に基づき算出した価額を時価としており、入手した価格に使用されたインプットが観察可能なインプットを用いている場合または観察できないインプットの影響が重要でない場合については、レベル2の時価に分類しており、重要な観察できないインプットを用いている場合については、レベル3の時価に分類しています。

② 貸付金

保険約款貸付については、貸付金額を解約返戻金相当額の一定の範囲内に限るなどの特性により返済期限を設けておらず、金利条件等から時価は貸借対照表計上額に近似しているものと想定されるため、当該金額を時価としており、レベル3の時価に分類しています。

③ デリバティブ取引

取引所取引は該当がありません。店頭取引については、外国為替相場、金利等のインプットを用いて、将来キャッシュ・フローの割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定した価額をもって時価としています。

店頭取引のうち観察可能なインプットを用いている場合または観察できないインプットの影響が重要でない場合については、レベル2の時価に分類しており、重要な観察できないインプットを用いている場合については、レベル3の時価に分類しています。

(4) 時価をもって貸借対照表計上額とする金融資産および金融負債のうちレベル3の時価に関する情報

① 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益

(単位：百万円)

	有価証券	
	売買目的有価証券	その他有価証券
期首残高	11,159	52,252
当期の損益又は評価・換算差額等		
損益に計上(*)	3,700	9
その他有価証券評価差額金	-	2,859
購入、売却、発行及び決済	15,226	26,365
期末残高	30,086	81,486
当期の損益に計上した額のうち貸借対照表日において保有する金融資産及び金融負債の評価損益(*)	3,700	-

(*) 損益計算書の「資産運用収益」および「資産運用費用」に含まれています。

② 時価の評価プロセスの説明

会社の定める基本的方針に従い、金融商品の時価は、金融商品の売買を行う部署から独立した部署が算定および検証を行います。

時価の算定にあたっては、個々の資産の性質、特性およびリスクが最も適切に反映されるよう算定しています。また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法およびインプットの確認など、適切な方法により価格の妥当性を検証しています。

- 消費貸借契約により貸し付けている有価証券の貸借対照表計上額は 3,042 百万円です。
- 債権のうち、破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権、三月以上延滞債権並びに貸付条件緩和債権は、該当ありません。
- 有形固定資産の減価償却累計額は 3,989 百万円です。
- 保険業法第118条に規定する特別勘定資産の額は 66,817 百万円です。なお、負債の額も同額です。
- 関係会社に対する金銭債権の総額は 0 百万円であり、金銭債務の総額は 3 百万円です。
- 繰延税金資産の総額は 31,308 百万円、繰延税金負債の総額は 5,863 百万円です。繰延税金資産のうち、評価性引当額として控除した金額は 72 百万円です。

繰延税金資産の発生の主な原因別内訳は、保険契約準備金 19,154 百万円、無形固定資産 4,723 百万円、価格変動準備金 4,068 百万円、退職給付引当金 1,774 百万円です。

繰延税金負債の発生原因は、その他有価証券の評価差額 5,863 百万円です。

当社は、グループ通算制度を適用しています。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第 42 号）に従って、法人税および地方法人税ならびに税効果会計の会計処理および開示を行っています。

11. 契約者配当準備金の異動状況は、次のとおりです。

当期首現在高	4,398	百万円
当年度契約者配当金支払額	3,116	百万円
利息による増加等	0	百万円
契約者配当準備金繰入額	3,026	百万円
当年度末現在高	4,308	百万円

12. 担保に供されている資産の額は、有価証券 3,042 百万円です。

また、担保付き債務の額は債券貸借取引受入担保金 3,078 百万円です。

13. 保険業法施行規則第 73 条第 3 項において準用する同規則第 71 条第 1 項に規定する再保険を付した部分に相当する支払備金（以下「出再支払備金」という。）の金額は 334 百万円、同規則第 71 条第 1 項に規定する再保険を付した部分に相当する責任準備金（以下「出再責任準備金」という。）の金額は 1,156 百万円です。

14. 1 株当たりの純資産額は 5,557 円 13 銭です。

15. 契約の諸条件に照らして、以下の①②に該当する一定の再保険契約（保険業法施行規則第 71 条第 3 項に規定する再保険に係るものを除く）に係る未償却出再手数料（受再保険会社から収受した手数料のうち、当該再保険契約により再保険に付した部分に係る将来の収益または利益から受再保険会社に支払うものをいう）の当年度末残高は 9,890 百万円です。

- ① 未償却出再手数料およびこれに附帯して支弁する費用その他これに準ずるものを受再保険会社に将来支払うことを約するものであること。
- ② 保険契約に係るリスクのうち、当該再保険に付された部分に係るリスクの一部を移転するものであること。

16. 売却または担保という方法で自由に処分できる権利を有している資産は、現金担保付債券貸借取引で借り入れている債券であり、当年度末に当該処分を行わずに所有しているものの時価は 35,728 百万円です。

17. 退職給付債務に関する事項は次のとおりです。

（１）採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付型の制度として退職一時金制度を設けています。また、確定拠出型の年金制度を設けています。

（２）確定給付制度

① 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

期首における退職給付債務	5,226	百万円
勤務費用	589	百万円
利息費用	97	百万円
数理計算上の差異の当期発生額	△ 479	百万円
退職給付の支払額	△ 446	百万円
過去勤務費用の当期発生額	-	百万円
その他	-	百万円
期末における退職給付債務	4,987	百万円

② 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

該当ありません。

③ 退職給付債務および年金資産と貸借対照表に計上された退職給付引当金および前払年金費用の調整表

積立型制度の退職給付債務	-	百万円
年金資産	-	百万円
	-	百万円
非積立型制度の退職給付債務	4,987	百万円
未認識数理計算上の差異	1,152	百万円
未認識過去勤務費用	-	百万円
その他	-	百万円
退職給付引当金	6,140	百万円

④ 退職給付に関連する損益

勤務費用	589	百万円
利息費用	97	百万円
期待運用収益	-	百万円
数理計算上の差異の当期の費用処理額	△ 55	百万円
過去勤務費用の当期の費用処理額	-	百万円
その他	-	百万円
確定給付制度に係る退職給付費用	631	百万円

⑤ 年金資産の主な内訳

該当ありません。

⑥ 長期期待運用収益率の設定方法

期待運用収益は見込んでいません。

⑦ 数理計算上の計算基礎に関する事項

期末における主要な数理計算上の計算基礎は以下のとおりです。

割引率	3.3	%
長期期待運用収益率	-	%

(3) 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は 285 百万円です。

18. 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しています。

2025年度〔 2025年4月1日から
2026年3月31日まで 〕 損益計算書

(単位：百万円)

科 目	金額
経常収益	551,900
保険料等収入	461,968
再保険料収入	432,086
運用配当金・配当	29,881
資産利息及び証券の価値の増減	85,996
有価証券の価値の増減	64,779
有為その年保支	63,345
有為その年保支	1,347
有為その年保支	86
有為その年保支	9,472
有為その年保支	1,635
有為その年保支	0
有為その年保支	10,109
有為その年保支	3,936
有為その年保支	597
有為その年保支	1,050
有為その年保支	2,257
有為その年保支	30
経常費用	524,015
保険金等支払	256,315
年給解再	43,515
責任準備金積立	11,780
責任準備金積立	61,901
責任準備金積立	113,487
責任準備金積立	3,220
責任準備金積立	22,410
責任準備金積立	130,752
責任準備金積立	130,752
責任準備金積立	0
責任準備金積立	35,310
責任準備金積立	346
責任準備金積立	34,493
責任準備金積立	297
責任準備金積立	45
責任準備金積立	128
責任準備金積立	96,024
責任準備金積立	5,612
責任準備金積立	1,264
責任準備金積立	2,075
責任準備金積立	1,838
責任準備金積立	184
責任準備金積立	249
経常利益	27,885
特別損失	1,019
固定資産の減価償却	10
特別償却	1,008
特別償却	1,008
契約者配当準備金繰入	3,026
税法引当金繰入	23,839
法人税等	7,074
法人税等	△697
法人税等	6,376
法人税等	17,463

注記事項

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引による収益の総額は 71 百万円、費用の総額は 1,724 百万円です。
2. 有価証券売却益の内訳は国債等債券 3,615 百万円、外国証券 5,735 百万円、その他 120 百万円です。
有価証券売却損の内訳は国債等債券 33,817 百万円、外国証券 675 百万円です。
3. 支払備金戻入額の計算上、足し上げられた出再支払備金繰入額の金額は 72 百万円、責任準備金繰入額の計算上、足し上げられた出再責任準備金戻入額の金額は 40 百万円です。
4. 金融派生商品費用には評価損 77 百万円が含まれています。
5. 1 株当たりの当期純利益の金額は 640 円 84 銭です。
6. 再保険収入には、貸借対照表の注記第 15 項に掲げる一定の再保険契約に係る未償却出再手数料の増加額 26,298 百万円を含んでいます。
再保険料には、貸借対照表の注記第 15 項に掲げる一定の再保険契約に係る未償却出再手数料の減少額 18,343 百万円を含んでいます。
7. 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しています。